

Title	俳句
Author(s)	山田, 平歩
Citation	懐徳. 1937, 15, p. 69-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88984
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

和歌

音代 湘園

満州

爾靈山の石に混れる藥莢ヤクキヤウを子供等拾ひ旅人に賣る (旅順)

駟足で上る爾靈山の石ころ道草いぎれ暑う汗に惱めり (旅順)

いかめしき警乗兵の乗りこめるこの夜行列車の客となりけり (満鐵)

神の世の大森林が石炭スエミに化し今の現ウツに糧カテを與ふる (撫順)

道といふ道はあらざり砂ぼこりうづまく荒地ひた走り行く (法輪寺)

俳句

山田 平歩

洞か峠 一句

青 芒 一 鳥 を 見 ぬ 峠 かな

圓福僧堂 四句

無思量によりて涼しき寺の縁
實をつけて萬兩の花咲きにけり

不立文字

放下せよと僧の言ひける涼しさよ

一日不作一日不食

作務了へし僧もどり來る蟬の中

○

澤 北 斗

曼陀羅の縁起を聞くや春の水
野々宮の御垣に牛や竹の秋
落葉松の林を出で夏の湖
少しばかり刈り残しある刈田かな
瀧の上の紅葉に夕陽残りをり

秋五題

白 井 文 溪